風のない日々

瀬戸内晴美

新潮社

風のない日々

瀬戸内晴美

新潮社

風のない日々

昭和六十一年七月二十日　発行
昭和六十一年八月二十五日　二刷

著者　瀬戸内晴美

装画　横井照子

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務〇三(三二六六)五一一一
編集〇三(三二六六)五四一一　振替東京四―八〇八

印刷所　二光印刷株式会社

製本所　大口製本株式会社

定価一一五〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Harumi Setouchi, 1986 Printed in Japan

ISBN4-10-311209-3　C0093

短編集　風のない日々

目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

風のない日々　7
鞦韆　27
影　49
マッシュルーム　69
微笑　89
蛇の衣　109
薄暮　131
告別式　169
侘助　185
梅　205
白萩　225
われもこう　247

風のない日々

風のない日々

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

風は全く熄んでいた。五十度に近い熱気だけが、油のように空気をねばらせている。
ホテルは、広い白い道路に面していた。
道路には、桑と樫とアカシヤのいりまじった並木が、黝く見えるほど葉を繁らせてつづいていた。
道路の向うに、公園のポプラの森が広がっている。
陽は傾きかかっていたが、暑さはいっこうに衰える気配もなかった。
ホテルの正面入口の大理石の階段に腰を下ろし、煙草を吸っている石津祥二の表情は、濃いサングラスの陰にかくれて見えなかった。
「これ、シルクロードでしょう」
低いしゃがれ声で、佐々木朝子が石津の背後に来てつぶやいた。
石津は身動きもせず、答えもしない。朝子はソ連領中央アジアの旅に出て以来、広い道さえ見

れば、どの町でもそういいつづけている。添乗員の横井浩が、その度、感情のこもらない口調で、
「いいえ、ちがいます。シルクロードを通る時は必ずお教えします」
と答えてきた。テープに吹きこんだようなふたりの会話に、十八人のグループは、動かない熱気と同様、すっかり狎れきっている。
石津の無口もまた、グループではもう了解ずみだった。朝子は、石津の横に並んで石段に腰をおろした。
「暑くて死にそう……シャワー浴びたらかえって暑くなっちゃった」
石津は答えないかわりに、マイルドセブンをさしだした。石津のつけた緑色の百円ライターをみて、
「そうだ、ライターを始末しなきゃ、うんと余っちゃったの」
と朝子がいった。
「……」
「愕いたわね、こっちじゃライターの使い方知らない人が多いんだもの、アシュハバードのバザールで、ほら、ライターあげたら、使い方わからないでポカンとしてたじゃない。火が出たら怖そうにとびのいたわ……そうそう、あのバザールで石津さん、ピックルス立喰いしておなかこわしちゃったのよねえ、梢さん見かけなかった？　森田さんもどこへいっちゃったのかしら」
「……」
「公園かもね、見て来よう」

朝子は煙草をくわえたまま、階段を身軽に下り、横断歩道のある四辻の方へ歩いていった。渋谷で小さなバーを経営しているという朝子が、離婚歴二度で、最初の夫の長男が石津と同年だということを、ハバロフスク以来石津は同室の森田康夫から聞いている。朝子はブルージンが似合う小柄な軀つきで、ハスキーな声とはおよそ釣合わない童顔をしていた。

朝子がまだ白い道路を渡りきらない時、大谷梢がホテルから出てきて、石津の背に近づいてきた。さっき、朝子が坐ったのとは反対側に、朝子より石津に距離を置いて坐った。

石津は三本めの煙草に火をつけたが、梢にはさしださなかった。酒には強いが梢は煙草をたしなまない。

――アルマ・アタは好きよ、一番心が落着くわ。

梢は胸の中で喋る。この旅に出て、石津とふたりになると、声に出さない会話をいつのまにかしていた。グループの仲間と食堂や空港の雑踏の中にいる時も、梢は石津に話しかけることがあったが、声には出さなかった。いつもではないが、時々、石津のやはり声にならない答えが聞えてくることがあった。

自分のことを石津がどの程度知っているのか梢はわからなかった。お喋りの朝子が森田の聞き上手に聞きだされたことが、そのまま石津の耳に入っているだろう。学生結婚した夫とは、一年半で別れたこと、その後、何人かの恋人を経て、十五も年上の男との関係が長くつづき、男の援助でステンドグラスの工房を持ち、カルチャーブームに乗って教室も開いて結構採算があっていること。それから先のことはどこまで朝子が喋っているか想像出来ない。朝子が森田から聞き出

してきたのは、石津の妻が女優で、人気が出始めているということぐらいだった。
梢にわかっているのは、石津が今、幸福ではないということだけだった。それは朝子の情報ではなく、梢の勘だった。幸福でない者だけが持つ心の鏡に映る石津の憂悶が、梢には見えた。同じことが石津の鏡にも映っていて、梢は自分の深い鬱屈も、石津に見抜かれているだろうという安らぎがあった。それがなぜ安らぎなのか梢にはわからなかった。
ブハラの旧市街の中央に聳えているカリヤンのミナレット（尖塔）は、一名死の塔とも呼ばれている。その日は日中五十度に達した暑さで、頭の中は石綿がつまったようになり、何の感情も思索も起らなかった。
カラハン王朝に建てられたそのミナレットは焼煉瓦を積みあげて築かれ、中央アジア第一の高さを誇っている。すっきりした姿が一点の雲もない蒼穹に向って伸びているのは、暑気と疲労で鈍くなった神経にも爽やかでまばゆかった。罪人を袋にいれてその塔頂から墜す刑罰があったと添乗員の横井が説明していた。
「その刑罰の多くは姦通した女にあてられたそうです」
この秋結婚するという横井が、素朴な口調で説明を結ぶと、女たちの間に鳥の羽音のようなざわめきが生れた。
「袋にいれられて墜されるのと、そのまま突き墜されるのとどっちが怖いかしら」
梢は朝子にいったつもりだったが、男の声がすぐ傍でした。
「袋の方がいやだな、想像力が働くもの」

壁ぎわの日陰の石畳に、脚を投げだしていたのは石津だった。思わず石津の顔を見かえった梢の視線を、石津のサングラスを外した目が見つめかえした。
「どうせなら裏切った相手に袋の口をしめてもらいたいわ」
石津は答えず、サングラスをかけ直して死の塔を仰ぎ見つめた。いつのまにか他の人たちは向いの回教学校(メドレッセ)の方へ行ってしまい、二人だけがそこに残されていた。
「八百数十年も前から建っているんでしょう。何人の罪人が墜されたかしら」
「墜されたい」
石津が訊いた。梢は曖昧に微笑した。
「あなたは」
「墜したい」
石津がはっきりいった。サングラスの奥の目がうるんでいるように見えた。

広い道路に、それでも時々自動車が走っていた。人はほとんど歩いていない。
公園の森の向うに碧い王冠のような回教寺院(モスク)の円屋根が浮んでいる。その屋根の上空に大きな昼月がかかっていた。白い月が空の泪の跡のように見えて、梢はやさしい気分になっている自分を感じていた。
たぶん、長い男との関係は断たれるだろうと思う。この旅のはじめから、それは予感したような気がする。男との様々な時間が頭の中を駈けめぐっていく。死の前の人間の想念とはこんなも

のかもしれないと思う。
——わたしは別れるわ、たぶん。
何の関係もない石津にそれを告げたくて、ふっと笑った。石津が話しかけられたように首を廻して梢を見た。
——あなたも別れるんじゃないかしら、たぶん。
梢の声が実際に聞えたような表情で、石津は両腕を首の後ろに組んだ。暑さは気のせいか、ほんの少し衰えたようだが、そよともない風のせいか、風景は白い炎をあげつづけているように見える。汗が膿のように湧いてくる。
「あの女の目、どこを見ていると思う」
梢は耳に聞えた石津の声を、石津の心の声のないつぶやきかと一瞬疑った。
「そら、あそこのベンチの女」
石津が梢を見ないで低い声でいう。
ふたりの坐っている石段から、そのベンチはわずか三米ほどしか離れていない。女がふたり並んでこちらにむいてかけていた。一人は赤と緑と黄の矢絣のような派手な布の民族服を着ていた。もうひとりはこのあたりでは珍しい白いレースのワンピースを着ている。
石津のいっているのはワンピースの女だった。パーマをかけた髪に暑くるしく縁どられた女の顔はもう若くはなかった。
ここからでも見える濃い眉が切れ目がなく二つつづいていて、その下の窪んだ目はひどい斜視

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com